重修真書太閤記

八編 八

へ13
459
78

へ13 特
號 459
巻 78

重修真書太閤記八編巻之廿二

羽柴於次丸秀勝桒名城を襲ふ事
并瀧川左近将監夜討相違の事

瀧川左近将監一益ハ羽柴筑前守ふ桒名近邉を放火せられしを憤りこれを追拂んとめ逆寄ふ押寄ける処却て筑前守の先手中川瀬兵衛尉清秀長岡与一郎忠興等ふ攻破られ剰へ譜第の郎等多く討せし遺恨骨髄ふ通りて口惜しけれ共筑前守ハ三万餘の大勢あり味方ハわづかふ一万ふ足らず平塲の掛合心元なし但筑前守の勢ハ勝ほこり

て陣中定めて打くつろぎ休息なさるなくんその
ところへ夜討しく一戦ふ勝負を決すべし是去ぬ
る永禄のはじめ桶狭間ふて右大臣殿の今川義元
朝臣を襲ひし軍法なりと云ハ谷崎忠右衛門倉地
郷右衛門室山備中守これを承り矣然るべくゆ
と同心しつれ共三人共浅手重手負しりのなれバ
今夜の出陣覚束なしと猶豫しける処へ嶺の城ふ
篭りし瀧川儀太夫詮益青地類母宮地左内打揃て
馳来る左近将監これを見て大ふ驚きしかども左
ならぬ体ふて何也へふ城を開て出来りしぞと問
はれバ儀太夫類母左近将監の書翰ふて東名長島

の危急を告られしゆへ技城ふ在て防戦せんより
本城を救ふべき為ふ来りしと告さらバ軍中士卒
の氣を損ずべしと思ひなくり嶺の城ハ別儀もは
ハず當所の御合戦急ふましまん由承りゆ間御加
勢のさめ参向さトせしりバ左近心中ふ嶺の城落
なり且く此者共遁れ来りし者と覚りつれ共其始
末を穿議して弥味方の氣を破らんも詮なしと思
ひ返し日頃の契約違へず早速ふ加勢としく罷越
ゆ條神妙なり但荒手なれバ儀太夫先陣として四
百餘人を引率し敵陣近く罷向ひ在家へ火を掛て
焼立べし次ふ青地類母倉地郷右衛門を呼其方共

二人ハ七百餘人を二手として左右より攻かゝり儀太夫を引挟みてこれを救ふべし其内ふハ左近将監進んで是を救ふべし谷崎忠右衛門室山備中等ふハ本陣を守らすべしと云ければ何れも究竟の計策なりと同心し各用意ふかゝりける然るふ桒名へ向ひたる羽柴於次丸秀勝桒山修理亮中村孫平次一氏加藤孫六嘉明二千餘人高山右近大夫長房千五百餘人何も船手ふて山手の相圖をまつ中ふも羽柴於次丸桒山修理亮ハ陸へ人數をあげひそまり返りて夜の更るを待居たり山手ふハ明石与四郎大谷慶松木村小隼人三百人の者共山々

峰々ふ走り散りて松明數百本二行ふ打ふりて火の手をあげよと定めたり又高山右近大夫ハ海手ふ大篝を五六ヶ所ふ焚て大筒を透間もなく打掛よと定めらる去程ふ夜も既ふ亥子の剋ふなりしころ山々峰々ふ松明その數幾許と云ことを知らず焼つゞけ大勢の押寄る如く見えさるを桒名長島城中の者共仰天しこハ誰人の寄るふや但美濃の味方の後詰ふやなど見るほどふ濱手の方ふ鉄砲の音頻りふ聞へけるふより是ハ不思議と見渡せバ大篝五六ヶ所ふ焚つゞけて大軍の陣取し如く見えたりいつの間ふ爰まであの大勢を押寄けん

思ひに寄らん然バ山手の松明に定めて敵と覚へより如何すべきと狼狽し手足をそらりに走り廻る城の預日置五郎左衛門瀧川彦次郎世に勝れたる剛の者なれバ些も騒がず駈廻りて下知しけるハ汝等かの松明や大篝に肝を消どもこれハ筑前守が昔より為得たる奇兵の術にて真に大勢の寄来るにハ非ずそれにさぞからるゝ愚さよと或ハ恥しめ或ハ笑ひ塀に上り櫓にあがりて見渡うちに於次丸秀勝衆山修理亮以下二手に分れ関の聲をあげ鉄砲をうちかけえい〳〵と声をかけつゝ押寄れバ城中の雑人大方静まりしりのう

又さハさ立然バ山手の松明に海邊の篝に奇兵の術とも思はれず真にかの大軍にかこまれてハ脱れ出べき道にあらし何處か敵の透さると逃出ん方を求むる其処へ羽柴於次丸衆山修理亮をや近々とおし寄て鉄砲を放ち箭を射かけしかども城中以の外に周章し防ぐべき共為ざりけるにより寄手ハ弥勢を得て既に三四の丸を乗取らんと為し時に日置五郎左衛門瀧川彦次郎工夫して頻に相圖の狼烟を上しかバ寄手これに疑を起し少し責口を緩め瀧川が帰り来りし時の手當をすなど又瀧川左近将監ハ夜討の支度調ひけるによりすぐに

打立んとありける處へ桒名長島の留守居のもの
より早打を以さゝ申たるハ海手よりも山手よりも
大軍寄せ来りハ必定敵と覚へ候御用心のため早
馬を進じ候と申も果ぬに海手より敵寄来り只今
合戦最中に候と注進す一益これを聞てこハ如何
にせん假令夜討に勝たり共桒名長島の内を攻取
れてハ詮なし然バ早く居城の敵を追拂ひ其上に
て筑前守と一戦すべしまづ儀太夫頼母を大将に
て五千六百餘人を先鋒となし一益ハ馬廻りに千
八百餘人を引率し桒名長島両城の急難を救ふべ
しと揉にもんで引返す桒名にてハ於次丸修理亮

城を手痛く攻しかども城中にて狼烟を上げしを
見てさてハ左近将監を呼返すならん其勢五六千
も有べし味方に比べて對々の勢なれバ合戦する
共怖しからずたゞし我々ハ只かくの如く押寄て
桒名長島両城の者の肝を潰させかつ左近将監を
あちこちに駈ゆるかせて事足り左近が勢ハ何處
まで来りしぞ早々人數を引上よと下知し両城へ
向ひし勢をまとめて船に取のり白子をさして引
さる如く見せ是も同じく船に打のり瀧川が形
返す高山ハ只篝火をのミ焼すてゝ未だ大勢の屯
勢を見居たり又山手に向ひし明石大谷木村の人

々ハぬけくに引返されバ峯にも尾にも松明の燃さしのみぞ残りけり瀧川ハ鞭に鐙を合せけて立すみ立支り廻りて見れバ敵一人もなく峯に焚つゞけし松明も海手の篝の影もなし一益太に驚き呆れて先城に入て留守居の者に容子を尋るに城内を打めぐりて見るに如何にも合戦有つと見え塀に射さりし矢も残り爰かしこに消防ぎさる火箭もなかり然共寄手ハ一人も見えず餘りの不思議になりしや狐狸の所為にやあらんと疑ふもなり左近将監大息継でさしるハ抑人の智恵ほど世に怖しき者ハなし昔ハ中村藤吉郎木下とあり羽柴とかえ

れど其身ハ同じ藤吉郎昔ハ信長公の御草履とりありしが御草履とりハそれ丈の智慧炭薪の奉行となれバ炭薪の智慧西國の探題職となりてハ西國探題の器量を顯ハし今又天下の御後見としく神変不思議の奇計を施す一益なれども尋常の侍にてハなかりしが筑前守に斯まで自由に操られし口惜さ此定にてハ我等なんども此人の門に立ならん口惜共悔し共云べき詞を知らバ去とて如何せんとて閑に城中へ引入し士卒の疲を休息せしめ長島の城を開き瀧川彦次郎同儀太夫みな桑名へ籠らせ軍の評議を凝しけり

筑前守謀略瀧川を苦しむる事
并瀧川主従桒名退去の事

羽柴筑前守の先陣中川瀬兵衛尉清秀長岡与一郎忠興二陣蜂屋出羽守頼隆いづれも昨日の軍に瀧川勢打まけよき者多く討せされバ必定夜討に寄るあらんと思ひしりバ鎧の上帯つよくしめ馬の腹帯もゆるめず待られ共桒名勢さらに音もせずあまつさへ左近将監陣を拂ひて本城へ引返へしたるによりて其よしを筑前守の本陣へ告知らせ三人ハ朝明郡富田まで進で陣をとり後陣の一左右を待居たり然るに羽柴於次丸秀勝桒山修理亮等

本陣へ参向し桒名長島を十分に調略なし敵を怖させ軍勢を引上げし容子を委しく言上なししかバ筑前守大ひに悦び其競ひに今少し陣を進むべしとて四日市に移し桒名とその間三里八町におし詰られ瀧川桒名に籠城せしと聞いざや一責せめて見んとまづ軍勢の手分をこそハなしたりけれ先手の先鋒ハいつも中川瀬兵衛尉二陣ハ蜂屋出羽守搦手ハ長岡与一郎桒山修理亮羽柴於次丸秀勝三陣ハ中村孫平次平野權平片桐助作段々に續き其次に総大将筑前守秀吉陣をすゑ左右へ下知を傳へられ旗本にハ加藤虎之助福島市松石川

兵助脇坂甚内加藤孫六前野勝右衛門石田左吉その外いづれも一騎當千の勇士あり軍奉行にハ増田仁右衛門小西弥九郎熊谷内膳粕屋助右衛門軍目付にハ杉原七郎左衛門尉家次これハ七郎兵衛家利の嫡子にて浅野又右衛門が妻及び朝日殿の弟なれバ筑前守の北の方の叔父にぞ有ける又荒木平太夫を添られける其勢都合三万八千余海手へハ九鬼大隅守嘉隆高山右近太夫長房兵船百余艘を漕つらね大旗小旗山下風に吹なびかせ又波のうへ浮ぬ流れぬなかびさし来名の城の三方を取圍み次第〳〵に攻近付ける左近将監も

智謀すぐれしものなれバ海陸の寄手の手當をなし今や〳〵と待かけける筑前守の勢海陸より攻入て在々所々を放火し堂社仏閣を追捕し鯨波の聲を揚攻鼓の音喧しく寄るとハ思へるれ共敵更に見え来らず一益も筑前守のために度々敗軍しつるのみならず亀山の城を落され嶺の城を計略せられ儀太夫以下落来りて爰にあり長島桑名両城へ勢を分て軍せんも難儀なり如何せんとありける時甥の瀧川彦次郎光益進み出て申けるハ両方の軍議相違して筑前が為に不覚を取りしこと返す〳〵も残念にハ候へ共是又時節到来とすべく

候我々をはじめ譜代の者ハ両城に引分れて軍仕候
共死を軽んじ候を尋常の習なく更に珍らしから
ずさりながら下々の者ハ大軍に恐怖して一向物
の用に立べく候はねど其愚案を廻らし候に尾州
海東郡蟹江城ハ要害宜しく候へバ両城を捨て彼
地に御籠候ハヽ必定御開運さるべく存候とかく
する内に柴田も出張仕るべく候左も候ハヾ筑前
江州へ引返し可申候其跡なく又両城を取かへし
候もんを何の難きをり候べき筑前更に蟹江の城
に引退かんとハ思寄候まじく候何れにも只今両
城をすくひ候支さぞかし無念に思召べけれ共敵の

鋭氣を避て味方の勇氣を養ふ一端にて候とやけ
れバ左近将監よにも不平の氣色なく我織田家に
仕へしより功労を積て東國の管領職となりし身
が右大臣殿御事ありし後御弔の為に馳帰りし処
遠路と云ひ不運にして途中様々の事に出會延著
に及びしを筑前守に恥しめられ又三七殿ハ其が
婿君におはしますを筑前守いさくおさえめ奉り
しを遺恨云ばかりなしその上筑前守のさえに亀
山嶺の両城を落され又桑名長島を棄んと近ごろ
以て残念なりされバ一益に於てハ一人なりとも
當城に楯籠り筑前守を引請快く一戦し萬々一か

なハざる時ハ城に火を掛腹切て身を滅し名を後代に残すべし其方達ハ心のまゝに立退きなへといひ棄其座を立後の障子を引かけ奥へ入しかバ並居し侍共呆れて其まゝ退出志たりけり兎角するうちに夜明ければ筑前守の軍兵鬨をあげ鉄砲を打かけ〳〵攻寄けるを見て城中の兵士ども塀に上り櫓に登り寄手の陣を見渡すに海上にハ兵船いくらと云數も知らず漕つらね陸にハ大旗小旗家々の紋を書て透間もなく楯竹束をかつぎつれゑい〳〵声をあげて寄たりけり城中の兵士共かの大勢に向て何と軍のなるべきぞいかゞハせんと手に汗を握り只落支度をのみぞ志たりけり城の大手の預り日置五郎左衛門室山備中瀧川彦次郎同儀太夫走り廻りて下知しけるハ寄手多しといへども皆近國の仮武者にして只人なくに鬨の声をあぐるばかり實に心を戦ひに入るゝものなし面々爰を怺よせがて運を開くべきぞと士卒をはげまし是を勇めて持場〳〵を固めさせ防戦の術を盡しける中にも伊勢國住人小林直八郎正道木藤藤左衛門繁房両人強弓の精兵なりければ大手の櫓より大矢を射出しけるか近々と寄さる勢なれバ一矢に二人三人手負ハかれ共仇矢ハ更

に無りけり中川瀬兵衛これを見て城中の射手ハ
只二人ぞさのミ恐るゝをかハ味方に火箭を射る
人ハあさりと走り廻りく下知しけれバ中川が
手の兵承りぬと云もあへず七八人思ひ〳〵に火
箭を射しかハ櫓の軒に燃付たり城中にてハ是を
消んと立騒ぎける処へ本陣より平野権平長泰使
に来り好む処の十三束三伏鳥猟根の二三寸ばか
りあるを白滋藤の弓にうち番ひよつ引兵と放せ
ハ誤さず小林直八郎が胸板のはづれより押付の
板迄鏃白く射出しされバ何かハ以てたまるべき
櫓より真逆に落て死てけり中川が手の者これに

氣をえく競ひかゝり息をも継せず攻けるにより
城中以の外難儀げに見え既に大手の門打破りつ
べかりける時本陣ゆく引螺を吹立しかバ中川が
勢も心ならず攻口を引退き本陣へ馳集る城中に
ても何とか思ひけん切ても出ず追もせず相引に
こそなりゆけれ然るに瀧川方にてハ室山備中日
置五郎左衛門尉瀧川彦次郎左近将監の前に出て
申けり今日の合戦味方ことく難儀の処小林木藤
が弓勢により一防ぎ防ぎてゆひしを平野権平が
為に小林射落され大手の門すぐに破られゆえん
と心を苦しめゆ時筑前守いかなる心にや軍兵を

引あげては其の軍略までに不審にはありしや江州邊に内乱の起りて急に引返すにやと推量仕るに緩々と兵糧炊く烟も立陣中如何にも静かに見えては左すれバ内乱共思はれず筑前守ハ三四万の大軍なり此方ハわづかに六七千に足らざれバ然爰にて防戰其詮なく覚へは早く蟹江へ御引取彼地にて防戰の便宜を得はうちに岐阜又ハ柴田の後援もはべしと勸めけるにより一益も漸く退屈しつるにや然ば當城を開て蟹江に入べし然ながら筑前守の陣へ一當たてゝ其うちに落行くべしと評定一決し瀧川彦次郎室山備中を先陣となして三百餘人その夜三更に打立中川瀬兵衛が陣へ面もふらず切てかゝる清秀かねてより瀧川夜討に寄るならんと用心せしところなれ共これほど小勢ならんとハ思ひも寄ずされバ同士打して陣中以の外に混雜す瀧川ハ只寄手の陣を一さハぎさわがせし迄にて人數を引上城中へ引入る寄手の陣にてハ宵より筑前守嚴重に下知しけるハ今夜かならず夜討有べし但し當陣の外みだりに出會をなられとありけるにより中川が陣にありしにてその餘ハしづまりかへつて扣へとり瀧川ハ城中にかへり寄手へ一たて當れどもかれほどの大

軍あれバ切勝んとおもひも寄すいぞや蟹江へ引きのくべしと云ほどこそあれ我先ふと舟ふ飛のり水門より出て落ふけり又筑前守の陣へハ北國勢出陣の注進ありけるふより責かゝりし軍勢を引上しありこらへあバ瀧川桑名ふ安堵すべかりけるものを運の傾くところ人力ふ及びがたしとハかゝることをやいふべき

重修真書太閤記八編巻之廿二終

重修真書太閤記八編巻之廿三

筑前守秀吉賤ケ嶽備立の事
并柴田羽柴先陣手合戦の事

羽柴筑前守秀吉勢州へ出張し亀山峯の両城を落し桑名長島両城ふ向て海陸の奇兵を發し瀧川左近将監を脅かし瀧川夜討を謀れバ先達て遠筭を焚て其氣を碎き終ふ桑名城を圍んで其士を困め其勢を屈し城を抜んとするふ及ぶや江州長濱の柴田伊賀守が家老徳永石見守神谷越中守濃州大垣の池田勝入齋をよび岐阜ふ向ひし羽柴美濃守

の許より越前の柴田修理進北陸道の軍兵を引率
し江州柳ケ瀬へ出張し彼邊を放火するよし注進
櫛の歯を引が如くありしかバ筑前守諸将に下知
し虎口を引しりぞかしめしありこれを無体に攻
詰さらバ瀧川ハ世にきこへたる勇将なり定めて
必死とありて軍を挑むべしありしかからバ味方の
兵士も多く損じそのうへに日数を送るべし柴田
ハ短氣猛烈の大将なりすでに柳ケ瀬へ出張しさ
らんにハ進みて濃州へ切入岐阜の後援をなすな
るべし然らバ岐阜をかこみし美濃守秀長も難儀
に及ぶべく此を瀧川方へきこえなバこれにより

て瀧川ます〳〵一計をなすならん然バ味方の軍をに
六ケしかるべし今この虎口をゆるめさらバ瀧川
籠城にくるしみ退去のこゝろざしを起すもさも
なくハ切て出無二無三に死生を決するならんし
かりが自然と桑名長島両城ハ當時の持となるべ
し此二つに違ふて瀧川當城を守るならバ押のさ
め大将一人二人を殘し置筑前守ハ江州表へ進發
すべしと評定一決なりしに果して左近将監主従
もつかの勢にて夜討しけれバ筑前守すハや瀧川
當城を落るならん必ず追をなかれと下知せられ
けれバ諸大将いづれもその旨を守りて今やく

と待しかども城中りの志づかにして音もせず夜
ふけて見れバ城中の松杉の立樹に立そひし大旗
小旗のうへに烏の多く棲たるを見出しくさてハ
瀧川落たるにやと中川瀬兵衛塀に上り城中に入
てみるに人ハ一人もなしいつの間に落たりけん
流石甲賀の瀧川左近忍びの術に熟したりと云バ
しバ感心し筑前守にかくと告しかバ筑前守これ
を聞てこれ當方開運の前表なりと深く心中に悦
び次に峯亀山に向ひし諸将を呼返し両城をバ清
洲にまします北畠どのへわたし筑前守ハ濃州へ
至り岐阜をかこみし諸大将を褒美しそのうへに

て筒井順慶法印と蜂屋出羽守を美濃に残しおさ
次に手配をなして柳ケ瀬へ出立なり相従ふ人々
ハまづ一番に筒井伊賀守定次七千餘人島左近友
之松倉右近勝重両人の勢二千餘人合せて九千餘
人その次に長濱の与力神谷越中守大鐘藤八徳永
石見守三千餘人二番に赤松次郎則房蜂須賀彦右
衛門正勝父子二千七百餘人三番に木村小隼人重
綱堀尾茂助吉晴前野勝左衛門三千餘人四番に一
栁市助直盛淺野弥兵衛長政生駒甚助親正小寺官
兵衛孝高明石与四郎則遠五番に木下勘解由左衛
門尉同将監大塩金右衛門山内猪右衛門一豊黒田

吉兵衛長政中村孫平治一氏合せて一万二千六百人六番ハ高山右近太夫長房千五百餘人七番ハ堀久太郎秀政仙石權兵衛秀久千六百餘人あり八番ハ赤松弥三郎則友神子田半左衛門千七百餘人九番ハ桒山修理亮廣長長岡与一郎忠興三千餘人十番ハ中川瀬兵衛清秀羽田長門守義真二千八百餘人十一番ハ三好孫七郎秀次小川土佐守重光大谷慶松吉隆熊谷内膳直賢三千二百餘人十二番ハ羽紫美濃守秀長同於次丸秀勝一万二千五百餘人十三番ハ総大将筑前守秀吉の旗本として小姓馬廻ハ加藤虎之助清正石川兵助貞友平野權平長泰加藤孫六嘉明福島市松正則脇坂甚内安治粕屋助右衛門武則田屋右馬之助兼政平野九右衛門政重浅野八郎左衛門以下一万五千餘人後陣ハ杉原七郎右衛門荒木平太夫三千餘人兵糧小荷駄を奉行せり、その勢都合八万九百二十餘人江州柳ケ瀬を心ざして進發せり

甫菴本ハ一番堀久太郎二番紫田伊賀守勢三番木村小隼人堀尾茂助木下將監四番前野勝右衛門加藤作内浅野弥兵衛一柳市助五番生駒甚助小林管兵衛明石与四郎木下勘解由左衛門尉大塩金右衛門尉山内猪右衛門黒田甚吉六番三好

孫七郎殿中村孫平次七番羽柴小一郎殿八番筒井順慶九番赤松次郎蜂須賀彦右衛門尉伊藤掃部介十番赤松弥三郎神子田半左衛門十一番長岡与一郎高山右近太夫十二番羽柴於次丸仙石權兵衛尉十三番中川瀬兵衛尉其次ハ秀吉小性馬廻り弓鉄砲一万五千を三段に備へしが十三段をバ峯より峯を傳へに鶴翼に備へてけれバ北國より察しみるをまちくにしく十二万餘騎と見るもありて又十万に及ぶべしと云も有けるとあり秀吉の先陣八頭ハ弓鉄砲あり敵味方先手の間十町に過べからず鉄砲足軽のみにして

其日ハ相引にさとりけり敵合戦を挑まんならバ勝負までこそなく共もつれの合戦ハ有べきなり然るを敵とり合ざるハおぼつかなく秀吉卿思召翌日未明に足軽にまぎれ古老のもの十騎ばかりめしつれ峯によぢのぼりて敵の屯を見あふとなり

然るに佐久間玄蕃允盛政前田孫四郎利長行市山に陣を居後陣を待合せて攻上らんと擬しさりしに不計も前田孫四郎道中の餘寒に當り病氣以の外なりとて越前へ引返す佐久間玄蕃允ハ邪智深き性質にて前田が陣所へ至り病体を見にるにい

いかにも難儀の容体なれバ呆され果てぞ帰りけり然るに越前より浅見但馬守前田にかはりて参着し柴田にも當表出張をいそかれ候へ共餘寒強く持病再發いたされ候間今日明日の参陣おぼつかなしと申けるにより盛政大きに驚ろきさながらさる勇士なれバまづ秀吉の陣取の様を伺ひけるに十三段の備を二つにかけ六番までハ筒井を先手とし西山筋にそふて押よせ七番より十三番までの勢ハ堀久太郎を先陣とし東の道筋より押さりけり筒井が勢ハ堀が勢より三町バかりも先達東野村にて待合せさり後陣の勢ハ天神山に陣をとり前六段の人々ハ川を前へ當て東へ向て屯を張けるが筒井の勢の内より七八十騎行市山の麓へ陣取しハ誰なるらんと能見れバ松倉右近勝豊飯田三郎次直宗なりやがて佐久間が備を目にかけ今市の原まで押出し鬨を作り鉄砲を打かくれバ佐久間勢も劣らじと足軽を出して打合さり堀久太郎秀政三千餘人の内より家臣奥田三左衛門百騎ばかりを引かけて押かゝり越前勢と戰へバ越前勢も同じく鉄砲を打て揉合ほどに三左衛門かくてハ果じと人數をまして切かゝるを佐久間何とか思ひけん人數をまとめて引取さり奥田追

討にせんとすゝむを秀政これを止めて追えせずこれハ偽り逃て勝に乗とき大返しに返さんとの謀ありいざや軍をまとめて敵の形勢を見べきことて筒井勢をも諫めてくり引に引返しかの役所に篝を焚き用心厳重に白眼ありて備をさくとり

筑前守斥候の事
并賤ヶ嶽所々普請の事

筑前守秀吉ハ翌十二日の早天に竹中與右衛門尉重信石田左吉加藤虎之助片桐助作以下僅に十五六人を召具し足軽に紛れ行市山のみねに忍び上り敵陣を見積りのためにと越前勢追々に馳上りしと見え谷々峯々いづくもく軍兵の陣をとらぬところもなし其次第いかにも行届きて透まなきを心中に深く感じ竹中与右衛門に其方ハ伯父重治が傍にありつれバ兵法の荒ましもさこそ知さるならん斯の如く山間の谷間に陣をとることをなかうひつるやとありけるに与右衛門さらに承りしをもはもずとやせしかハ筑前守莞爾と笑ひその方知ざることハ有まじそれハ我に対しての礼義なるべし我その方の伯父にきゝしことあり今越前勢の陣ハ魚鱗鶴翼雁行長蛇の法に非ず谷々にかけて

陣と陣との間離れぐ〻しくこれを攻るに易く救
ふにかさく見せしハ敵を欺く希代の手配り並々
のりのゝ及ぶところに非ず能く心を用て見習ふ
べしと教へあひそれより本陣へ帰り舎弟美濃守
秀長をもじめ桑山修理亮以下諸将を呼あつめ昨
日手合せの軍に玄蕃が急に引とりしをいかにも
心ゑがたく思ふにより足軽にまぎれて敵陣の体
を伺ひ見しに玄蕃が勢を引上しと真にそのこと
わり有しなり然るに久太郎早く見積りしとみえ
て奥田三左衛門を呼止めて且筒井勢をも引とらせ
しを感心せり久太郎ハ如何にしく是を知りたる

やらん怖ろしくそもく勝家ハ剛勇一途の士と
思ひつるにこの山間に陣を取し心中を察するに
深き慮あり軽々と思ひ侮るべからず其ゆへハ某
をこのところに永々とつり置きされさそひなく
らんとき易からに軍をすゝめこの谷間の難所へ
引入れ前後より挟み討んと謀りしなり危ふかり
し軍立なる我昔竹中半兵衛にきゝしことあり我を
しり彼を知るハ百戦百勝といへり實なるかな我
もし彼の人のこゝろを察せんバ我一人のこゝろを
もつて軍をいどまバかならずあの谷間に引き入
れられ火攻にあひなましさからバ我も又もかり

どを工夫し得たりまう賤が嶽木の本の山に附城
を築き所々に要害をかまへ柵をふり厳重にそな
へて勝家の出陣を押ふべしそのうちに我濃州を
平均すべし面々油断すべからずと下知しめふ諸
大将いづれも筑前守の調略の奇なるを知ると
いへどもこの度の如く難儀なる戦場をせんしと
おもひもかけらるゝハ如何なるこゝろにくかるら
んと疑がひながら筑前守のさし圖にしたがひ木
をきりたふして堀をほり橋をわたし晝夜のしや
別なく皆の普請を急ぎけり元来筑前守ハ當国に
久しく住なれて所々の案内をハ知りたり敵の焼

のこしたる堂社佛閣の餘材を取りあつめかつハ
かの山の巓に大ひなる石あるべしこれをとつく
門の前に置べしこの谷の奥にかくのごとき大岩
あらんそれを使りに櫓をかまへよと事こまやか
に下知しめふ在所に老ひたるものさへも見もせ
ずきゝもおよばぬに山々谷々のつまりくを知り
あふをいつのまにかゝると皆人おぢおそれざりけり是
ハ長濱在城のとき政事の暇ごとに山野をかけま
はりめひしが今日の為とハ誰かハ知べき長濱在
城のころ百姓をよく懐けられ浪人を扶持しめひ
神主社人まで其自ごくに附て恩を与へめひしう

バ柴田ありとありてハいづれも本意なきことふ思ひ居たりしふ今日かくの如きを出来て筑前守の砦を普請さらるよしをきくより昔のなさけを思ひ出し今こそ報恩の時なりと拾ろざるふかびただしくはつまり我もくと出情し若労をいとえず働きにるふより日ならずしく堀土手出来なしくなり

市庵本ふ伊賀守勢を入置し天神山の城ハいささか出過益なしとて十町ぢかり引のけ本山ふ要害をこしらへあふたる山をもいよく丈夫ふこしらへ堀久太郎を入置たづが獄尾崎中川瀬兵衛尉その尾七八丁も隔つて高山右近大夫賤が嶽の城ふハ美濃守内桑山修理亮田上山ハ小一郎との本陣として居城なり遊軍ハ蜂須賀彦右衛門の尉生駒甚助神子田半左衛門尉赤松弥三郎明石与四郎小寺官兵衛その勢一万五千なりいづれもよらく弱きところへ助成すべきとのとなれバ木本邉ふ宿陣なしてより海津口の押ふハ丹羽五郎左衛門尉一万長岡与一郎三千ふて固めたりと見ゆ

佐久間玄蕃允盛政ハ筑前守戦をいどまバ陣をかさめ砦をこしらへ附城を築き連綿と要害を構へ

普請をいそぐを見るとそのまゝ飛脚を以て勝家のかたへ注進したれバ秀吉出陣し候が一向戦ひをいどみ申さずたゞ陣中を堅固に守り柵逆茂木を引ての上にしづが嶽木本本山二ヶ所に砦をかまへその外窮々に連ぎの要害をかまへ候て全く當方を押へんが為とみえ候この普請半も成就に及び候ハヾ筑前守ハ帰陣とおぼえ候ならくりつくこのところに筑前を釣りかされをかなふまじく候筑前が勢とも件の要害にこもり堅固に守り候ハヽ當方美濃へ打出るとも上方へ上るをもなるまじく候かの普請をさまたげ急々合戦をとげ候やう計略つかまつりたく候早々御出陣あるべく候御油断候ハヾ御大事に及ぶべく候とやられバ勝家これをきゝ其所労大かた全快せしかバ近日出陣せんとおもふところに盛政かくの如く申越しより何さま筑前守合戦をいどまず要害を普請するハ當方の計策を大かた推量せしとおぼへより謀りするゝ時ハ事かなはず筑前守ハすばやきものあり何のほどにか忍びを入れてさゝ出しつと知らる如何せん賤が嶽ハ江州第一の切処ありかしこに三四千の軍兵を籠なんにハ容易に攻破りがたからん去ながらこのまゝに止べ

さにならんとて三月十八日北庄を立ちすゝみにす
んで駆けつく十九日に柳が瀬のうち中尾
山に著陣し先陣へ此よしを告軍評定に及びけ
り

一書に三月十八日の天時を考ふるに五宮甲子
なり中宮を甲子将の泊処とし六宮を甲戌将と
し七宮を甲申将とし八宮を甲午将とし九宮を
甲辰将とし一宮を甲寅将として四宮は乙なり
三宮は丙なり二宮は丁なり北庄より柳が瀬は
九宮離にあたり甲辰将の位なり柳が瀬より北
庄は一宮坎にあたるすなはち甲寅将の座なり

甲辰土将を以て甲寅木将を伐利たるべからざ
と云ひし人ありつれども勝家用ひず遂に敗走
して身死し國滅るにいたると云へり
又一書に勝家出陣せんとして日次を問に中村
文荷斎云く三月は晝の間孤に向ひ給ふよろし
からず然とてこれほどに觸れ催ふしたる大勢
をいかゞゆるし給ふべき天時も人和に如かずと
申す左ありのをに泥みなく急ぎ御出陣あるべく
と申せしかども兎角勝家延引に及び給ひしと
もいへり
流布本に斥候の論なり浅暦用ふるに足ずより

て是を削る
甫菴本に秀吉二月八日江州長濱にありむきし
あり柴田ハいまだ北の庄にありといへども佐
久間玄蕃允大将として二万餘騎を率し天正十
一年二月七日木の下邊に至て出張すべきとの
用意ありと云々七日の拂暁に立出木の下さして
出張す同十日天神山木の下両城に押への勢を
置つゝ玄蕃允働きたりこのたびハ井口川を
切て放火せんとの議定ありしに前田孫四郎深
入して閑が原近邊まで放火し勝どきをあげ引
とりしあり云々秀吉翌日八日亀山の城より江

北さして打させあるに十日の暮ほどに長濱に着
て玉藤川井口近邊今日放火いたしつる由さゝ
あふくさゝも残り多きとかる今半日早く着陣
せバことごとく討留べきものをと足摺をしく千
悔しあくとゆかひあしかくて翌日志づがたけ
近邊へ押出し総軍勢を十三段に備ふと云ふ

重修真書太閤記八編巻之廿四

筑前守賤ゲ嶽人數配の事
并筑前守窃に濃州へ帰陣の事

去程に筑前守秀吉ハ賤ゲ嶽木の本両城の普請大形に出来せしかバまたく賤ゲ嶽に昇り味方の砦々を巡見なりて良久く四方を見わたし何ヵ工夫あしめふ体なりけるが早々本陣へ帰り入られ大岩山岩崎山の両処へ砦を築くべし尤今日中に出来すべしと下知しあひ即筑前守の得さる割普請の法を用ひて數千の人夫を呼出し何某ハ堀

なれ誰某ハ抗うて彼奴ハ木を切とすさまなく沙
汰あへバ三時ばかりが程に砦の形勢をなし
てけり是天正十一年三月十九日のことなり然るに
筑前守ハいつも忍びにあれしものを百人も二百
人もつかはれし程に柴田が北の庄を立ち今日柳
が瀬へ著陣せしことを疾く知られけれバ又例の人
夫に紛れて氷室にとなる篠尾崎へうちのぼり中
尾山の勝家本陣をうかゞひみるに本陣にハ煙な
びらぐ志く立上るこれハ何さま夕景の飯を炊く
なるべし三万餘騎といふハ真にさも有べし實も
北陸道七ヶ國を切平げよと故殿の御許ありしも

理ありやと隈もなく見とゞめさて本陣へ立帰り
諸将をほつめてくやされけるは先にもやせし如く
勝家某を釣おかんとて佐久間を先陣とし谷間々
々に勢を分置されども某何とて勝家の術に乗て
釣るべけんや但勝家兄長々と當國に出張し中尾
山に陣を取より我又一手ござしく勝家をかの山
より此方へ一足も踏せまじと思ふなり然バまづ
東野山菖蒲谷の要害にハ堀久太郎秀政の勢に弓
鉄砲のけの百餘人を添て籠置くべし
淡海國畫をみれバ柳ケ瀬の内に大谷今市中郷
東野と越前街道に續きとり輿地志略に東野村

古城跡民家の東の山にあり志津嶽闘戦の日堀久太郎秀政陣城の跡ありと云

堂木山の麓大杉山にハ山路将監正國同じく右の方にハ大鐘藤八一段上の方にハ蜂須賀彦右衛門正勝父子その左の方の尾崎に木村小隼人重綱東野山の要害より尾崎續き小堂木山の麓まで柵をふり中ほどにも又一ッの砦をかまへ小川土佐守忠則を籠め置たり

堂木山ハ東野越前守入道道義の城跡あり因て道義山と書を本とす大杉山ハ川並村八戸村等の西にある山なり文室山のつゞきの山なりといふ

賤ヶ嶽にハ桑山修理亮以則羽田長門守義真淺野弥兵衛長政等をさし置れ餘湖の海山の南大岩山の新砦にハ中川瀬兵衛清秀を籠めらる中川が砦より八町ほど隔て岩崎山の新砦ハ塀の土いまだ乾かねど大事の処なれバとて高山右近大夫をこめられたり田上山の付城にハ羽柴美濃守秀長をこめらる此城ハ少し廣き芝居なりしかバ筑前守の旗本衆を少々さしそへられたり天神山の砦にハ柴田伊賀守家老三人に木下勘解由左衛門尉を加へらる山内猪右衛門小寺官兵衛黒田甚吉生駒

甚介赤松弥三郎等ハ游軍となり弱からん方を救
ふべしと定められ筑前守ハ猿が馬場に本陣を
居られたる所に兼々の約定を違へず丹羽五郎左
衛門尉長秀海津口より越前敦賀へ兵糧を廻らす
よし注進ありけれバ秀吉大によろこび長秀の實
意厚きことを感じ長岡与一郎忠興を名代にて急ぎ
本國へ引返し海手より丹羽五郎左衛門尉に力を
合すべき由を示しけれバ忠興承はり早々丹後へ
引返すこのとき美濃の押へハ池田勝入齋父子稲
葉一徹入道両大将なりけるが池田稲葉の許より
早馬を立て勢州を退去せし瀧川左近将監一益先

度桑名にて敗北し夜に紛れて桑名を退去しつる
恥辱をすゝがんとて尾州海東郡蟹江の城に楯こ
もり近隣を放火し不日に清洲へ乱入せんと計候
これに依て尾州以の外騒動に及び候早くこれを
退治せずんバ岐阜と相議し両方より江州へ打入
可ャ候すくおさぬかど海東海西二郡ハ云におよ
バず葉栗郡より濃州まで瀧川に一味同心仕べく
候と注進きたりけれバ筑前守莞尓とうちわらひ
さゝぬく人々よ瀧川桑名を退去しつるをこの為
なりけり是をかりどハ疾に定め置たりかくてハ
瀧川が智恵も計り知られたり然らバまづ瀧川そ

かくて付て後柴田と一戦に及ぶべきなり油断なる
な大将たちとて砦々の掟たしかに沙汰しあひ三
月廿三日柳ヶ瀬表を出立なりて濃州大垣へ帰入
なり

柳が瀬より木本小谷春照藤川関原より垂井を
経て大垣まで十五里半十二町あり

然るに越前勢ハいまだ此義を知らで砦々の普請
も半なりけるところ出張せし行市山の佐久間玄蕃
允別所山の拝郷五左衛門山寺山にハ原彦次郎氏
次池原山に浅見但馬守中谷山に金森五郎八入道
大谷山に不破彦三元治橡谷山に徳山五兵衛中尾

山に柴田修理進勝家旗本を居られバ安井左近安
近柴田三左衛門以下谷々峯々に陣をとり敵寄せ
バこの谷あひに誘びき入れてうち取らんと構へ
たり又前田又左衛門利家ハ病氣に因て越前府中
に有りけるが少々快方なりけるにより出張して
両陣の容子を窺がひけるところ去ぬる十四日子
息孫四郎利長寒氣になやみしとて本國へ引返し
府中の城に入て養生す然るに羽柴筑前守より密
に羽檄を飛し又左衛門尉柴田の旗下に在てこの
度の軍に従がひさまたげ出陣遅々なるハ所見なり
りと覚へゆ天晴天下の神智名誉の大将なりと云

れしかバ又左衛門尉肝を消し我柴田が旗下に属志されし共存ずる旨のあるにより先陣をも望まんど嫡子孫四郎を従がそしむるといへども是また強て先陣を争ハせんとさまく病によつて引かへしされバ誰もそがこゝろを知りさるものなし然るを筑前守かく云はるゝをまさに赤心を人の胸中に置と云ふべし恐ろしくと感心せられけるところへ長九郎左衛門尉つと罷り出しかバ筑前守よりかくかく云ひつかはせとて消息を見せあひけれバ九郎左衛門尉うちかへしかへし是をよみて何さま右大臣殿の御跡にて天下の大将軍となり給はん

ハこの人なるべしこの人となまじひに鋒をあらそひて家國を滅ぼしなんもぜひに勿体なくに因て何となく御病氣と仰せ立られ引とりましくゆハド柴田勝ても申譯あり又筑前守勝ゆても若しからずは今度若殿の御帰城を幸に御父子とも府中に御籠居然るべくにと申けれバ利家も同心ありて早々馬をかへされけり柴田方にてハ又左衛門尉父子出陣なしとて何か事を欠くべきとへらぬ体にて居たりけるが瀧川蟹江に籠城し清洲領を放火するにより筑前守濃州へ進発せし由をきゝ出し北越の若殿むら秀吉の留守をさいはひ

に切りかゝり軍を始むべしと逸りたるを勝家聞
て否左にはあらず秀吉留守なれども秀吉が搆へし
要害いづれも堅固に見え容易に切かゝり人数を
損じ益なるまじそのうへに我大軍にて出張せ
しを知ながら美濃國まで足ながく打出し筑前守
何か心に得ざる謀なるべし血氣にまかせて推し
寄せなばはかりごとに陥いらんも如何にも残念
なりかつは筑前美濃へ行しといふがまこと歟いつ
わりか知がたしすべく勝家にまかせさまへやと
てさらに許容せず
三七殿再度柴田へ援兵を請ふ事

并勝家謀宇野某を敵陣へ遣さん事
筑前守秀吉柳ケ瀬表砦の手配りを定め防禦の調
略悉く諸将に教諭しいそぎ濃州へ馳せかへり大
垣城に入りや否同月廿七日より稲葉山及び瑞龍寺
山の舟城ハいふに及ばず岐阜本城へ押し寄せ大
軍をもつて十重廿重に打かこみ只一擧に揉おと
さんと鉄砲をうちかけ火箭を放ちたれバ櫓多門
に燃付て焼上りたるにより城中すつくのほかに
周章し寄手の陣を見こさせど五色の吹貫天にひ
るがへりて長蛇の蟠るが如く雲龍の游ぶに似さ
り瓢さんの馬印の數ハすでに數百に及で城を落

せし手柄をしめんに今にも又數を添んずらんと心も肝も動轉せりそのころ大旗小旗家々の紋かきたるを見るに畿内の勢ハ云に及ばず尾州濃州勢州江州にて弓矢にたづさはるほどの者ハ大かた向ひより暁のかぎりハ明星を焦し夜まもりの拆ハ遠峯谷にひゞきておびたゞしく援兵のはせ加はるとて日夜に引も切らず三七殿をはじめ城中にくハ勝家出張ときゝ此方よりも打て出たらバ前にハ柴田と合戰家中なるべしいかゞ引かへして當方と戰をいどむことを得べきやそのひまに濃州を平均し江南へせめ入り安土を根城として軍

するほどならバ筑前守をうち滅ぼさんと手間暇入べからずと計りつるに思ひのほか勝家をハ路次に砦を數ケ処築きておきへ置直に筑前守當國へ立帰り如此大軍を以てとり巻き短兵急に攻立るなれバ當城の落去遠からじと城中の男女老若うち寄り落支度をのみなしけるにより持口〳〵を固めさる諸物頭いづれも心々になりて如何にしてかハ妻子を助け己が身も始終安堵すべきや實も藥師寺公義が取ばうし取ねバ人のかずにあらし棄つべきものハ弓矢なりけりと詠ぜしも今ハ我身の上にかこち呆れはてゝぞ居たりけり信孝朝

臣もせん方なく再度勝家の方へ申合せし如く近作柳ケ瀬に出陣ありしかバ筑前守必定打て出べし中尾山あたり山深き処なく合戦に及びなバさしもの筑前守も進退ともに合期しがたく畢尤難儀なるべしそのとき當方籠城して戦をこゝろみ時宜をはかりて切て出直に江南へ乱入し安土を根城となし筑前守を討べしと存じ候処勝家出張なりしも筑前守戦をいどまず却て処々に砦をきづき要害をかまへ置候て其身ハ直に當国へ引返し當城をかこみ候を十重をとりその上に鉄砲火箭の足軽例よりも多く候由へ何時と云ことき

ありしぞ城中焼上り候により城中の老弱男女との外困窮に及べり早く勝家出馬ありて援ける、に非ずハ當城の落去数日の間に在べきヶ唇亡びて歯寒しとやハ當城落候ハヾ定て筑前守越前国へ乱入候べく候能々御勘考の上早々御手遣ひ待入候とぞされけるにより勝家大に仰天し然バ筑前守美濃国へかへりしヶ美濃へ発向せし由ハ聞つれ共真偽定ゕならずと油断せしを後悔臍をかみどもせんかたなし但し我今より岐阜を援ちんとすれバ路次ふさがりてたやすく人馬を発すべからず又筑前守の居る長濱を攻抜んとも処々の要

害堅固にして急々に攻破りがたし但し路次の要
害よしとも何程のことか有べき火急に押破りて
美濃へ乱入し三七殿と共に筑前守を挟みうつべ
し然らバ天を翔り地を穿たバ逃るゝ道あるべ
からず此時を過しなば如何にかすべきと跳り上
りく歯をくいしばり拳を握りてすでに居たりけ
るが佐久間玄蕃を呼び寄せ三七殿の状を見せこ
の状の如く岐阜の危ふきを旦夕にあり早く之を
すくふに非ずハ氣でやあるらん三七殿御自害にても
や有べき万々一左やうのことに及びなば筑前守の
威勢濃州尾州勢州にふるはれぬべし只今にてさへ

容易ならぬ筑前守なりそれに尾濃勢の力を増た
らんにハ弥以て制しがたかるべし岐阜の城いま
だ落ざるうちに當方加勢を出しなバ筑前守敵を
前後に受て軍すこぶる困窮すべし去りながら美
濃路にうち入らんにも路次の砦共をうち破りて
後ならずハ路ひらきがたし如何にしたらん此邉の
砦を切りおとし美濃路へ發向すべきその方の意
如何ぞと問ひけれバ玄蕃允しばらく思案し盛政
短才には候へども敵地の容子ハ前以てより計り知
てハ東野山の要害にこもり候ハ堀久太郎秀政年若
く候へ共弓矢の功者なるを勿々尋常の者に候ハず

ず岩崎山にこもり候高山右近大夫大岩山の中川
瀬兵衛田上山の羽柴美濃守賤ヶ嶽の桑山修理亮
いづれも／＼並々の侍に候はぬ事ハ匠作にも知
あふべく候然ながら是を攻て破られぬと云こと
ハかつて無く候へども味方も大分討死いたし候
べし因てこの程より肝膽を碎き思慮仕候に堂木
山にこもりをり候山路将監正國ハ元来匠作恩顧
の者に候ところ伊賀守へ附られ候より此間ハ
匠作へ踈遠に打過候あるべし只今伊賀守の与力
と云を以て筑前守にハ属て候へどもその本心の
如きハ匠作を踈く思ふべきものにあらじと存候

よつて誰にてもあれ将監と親しき者を遣はされ
将監が心を引て見候ぞやと存候将監今に匠作の
恩を忘れずハそれに就て謀も候べしと申により
修理進大によろこび其方の謀まことによし敵陣に
一人この方へ心を寄るもの出来さらんハ國の
二ツ三ツも与力に属せしより猶強かるべし誰か
ハ此使を勤めんものぞと尋けるに佐久間が組下
の鉄砲頭に宇野忠左衛門と云ものあり山路と同
國同里の者にして将監とハ竹馬の友なりければ玄
蕃允このことを聞出しその夜ふけてひそかに宇野
を呼び寄せ近習を遠ざけ只二人さし向ひ如何に

忠左衛門一大事の密議なりそれもへに招きしあ
り假令いゝものをわくも玄蕃が申を違背な
くきゝ入れのふべきやと云へバ忠左衛門承なり
夜中といひ急々の要事となるにて大方ハ推量し
てハ兼て知らせのふ如く臆病りのゆく一度も相
應に稼ぎしをなくハへ共二心と云りのハりちや
さだ何國までも主ハ一人主命なちバ火の中水の
底へも入れぬへ否とハナさじと云ふにより玄蕃元
より其方左いなる、あらんとハ存知てハへども
試にかくハ云しなり一大事と云ハ別義にならだ
其方ハ山路将監と入魂のよし承なり及ぶまとに

志かるやと云へバ忠左衛門いかにも将監とハ同
國同郷のよしみと云ひ竹馬のむかしより親しく
語らひあれてハゞ只今敵味方と別れてハもへ良
久しく便宜も承らりだと答ふその時玄蕃ひざを
すゝめ云かちバ其方山路方に相越し将監の本心
筑前守に従ふか又ハ近作のむかしの恩を思ふか
それを試みて告ぬへし将監近作のむかしの恩
を忘れずハ其方の力を以て将監に説て當方へ与
力せしめぬへこのこと成就するに於てハ敵の首十
廿うち取しよりも猶勝れる大功なるべしといへ
ハ忠左衛門何さま仰に従ひ将監方へまかり越し

弁舌をもつて其心をうごかし兎も角も返り忠のものになしぬべしとかられバ玄蕃允大によろこび其方いよいよ骨折て山路を味方へ引入れハド羽柴方の若一つ鉄炮の一発矢の一筋をも費やさず打落しさると同じく其大の忠功さるべし随分手をつくして匠作の心を安くすべし勲功の賞ハ直に行るべきなりと云ふより宇野も一段と喜悦し人多き中に某一人この大役を蒙るを面目の至とし一命にかけ急度首尾しすべしとて山路が陣中さして急ぎけり

重修真書大閤記八編巻之廿四終